

2025年10月の総評に代えて 高橋修宏

鏽びた手すりに頬をのせると  
空から  
絆創膏のにおいがする

こはくいろ（大阪府）

隠されていた「におい」の記憶を、そっと呼びますような作品。「鏽びた手すり」、そして「絆創膏のにおい」とは、幼い頃の小さな傷の記憶なのかもしれない。

広大な朝食会場にある檻 小野寺 里穂（神奈川県）

何らかの宿舎だろうか、団体旅行の光景だろうか。たのしいはずの朝食会場が、「檻」の一字によってイメージが暗転する。だが、その「檻」は、そこにいる者には見えないものなのか。

水を飲む牡鹿のように文字を産む  
万年筆は秋の静謐

常田 瑛子（山口県）

一行目、「牡鹿のように文字を産む」がエキセントリックでありながら魅力的。また「水を飲む牡鹿」の動きから、二行目の「秋の静謐」との対比、そして飛躍も面白い。

自転車で踏んで蛇かもしれなくて ムクロジ（群馬県）

たしかに、その生々しい感触だけは伝わってくる。「かもしれなくて」という言いさしの表現も妙に効果的だ。

ふらこの記憶の髪を切り落とす

檜野 美果子（宮城県）

その髪は、かつて「ふらここ」＝ブランコに乗って、揺れて、風と遊んだのだろう。  
「記憶の髪」という把握が生きている。

缶蹴りのために

飲み干すビールです

奥井 健太（滋賀県）

ささやかな行為の主客を逆転させた作品。もちろん「飲み干すビール」は、缶ビールだ  
ろう。いま、ここではビールを飲むことよりも、「缶蹴り」をすることが大事なのだ。

梨挽いで空は自由にさせておく

絵巻（東京都）

どこか、だまし絵のような感触の一句。「空」という広大なスペースが、それ自体意識  
があるようにも、また生きているようにも感じさせる。

夜を司書は古い奇書について語り

頷きながら椿は泥へ

互井宇宙論（埼玉県）

どこか、ゴシックロマンのような気配を漂わせた作品。「司書」、そして「奇書」と  
いう緩やかな言葉の流れから、一気に二行目へと飛躍、あるいは踏みはずし。「椿は泥  
へ」は、終末、あるいは死のイメージだろうか。

鰯雲あしたの予定はぜんぶ嘘

かち（千葉県）

加藤楸邨の〈鰯雲人に告ぐべきことならず〉など著名な句があるが、この句は異質、かつ現代的。下五「ぜんぶ嘘」が卓袱台返しのようで、あっけらかんとニヒリスティック。

船かえる 港の倉庫に蔦もみじ

鶴浦 るか（富山県）

おそらく船が出港したときは、その蔦は青々としていたはず。「船かえる」、そして、「蔦もみじ」によって、たしかな時間の経過が書きこまれた一句。

コンビニの灯が灯台に見える村

アカエタカ（宮崎県）

かつて、夕刻に田舎道で迷ったとき、こんな光景に出会ったことがある。「コンビニの灯」に導かれて、何とか見知った国道まで出た。あのときの「コンビニの灯」は、たしかに「灯台」でもあったのだ。